



# わたしの聖戦

女性が働くということ

138

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

## 「養子の日」にちなんで

日本財団が、4月4日を「養子の日」にするべくキャンペーンを始めた。

日本は、諸外国と比べ養子縁組が少なく、里親のいない乳児の9割が乳児院に預けられるのだという。実の親が育てられなくても、里親のもとで暮らす乳児はわずか1割ということになる。ちなみに、オーストラリアは90%以上、アメリカ76%、イギリスは60%の乳児が養子となっており、確かに日本の養子縁組は極端に低い数字である。

不妊治療を続けても子が授けられなくて養子を考える夫婦も少なくない。養子縁組を望むカップルの確かな数字はわからないが、不妊治療自体ここ10年で5倍に増えているというから、おのずと養子を育てたいと思う人々も増えてはいるのだろう。しかし、その願いが実際の数字に現れてこない要因のひとつが、公的システムの希薄さにあるという。1987年の民法改正で、養子であっても戸籍上実子と同じ扱いを受けられるようになったが、行政が積極的な姿勢を示さず、結局民間が主体となって養子縁組のあっせんを行っている。しかし、何をやるにもお金は必要であり、民間だけでは限界があるとして、日本財団はまずあっせん団体への資金協力や養親の研修

などを手がけるらしい。昨年、民間のあっせん団体が寄付金や手数料と称して多額のお金を里親から貰っているというニュースが流れた。こういった団体にお金がないのは世の常なので、日本財団による資金提供は本当に素晴らしいと、素直に思った。あっせん団体の



資金が潤えば、今よりも養子縁組の内容も充実し、養子を育てたい人々の夢が叶う、そんな期待を抱かせる。

ところで、このニュースは「恵まれない子どもに家庭の愛情を」とのタイトルで紹介された。国民の理解と意識を高めるために「養子の日」を制

定するのは悪いことではないが、「恵まれない子ども」と言われたほうはどう思うだろうか、少し悲しくなってしまう。かつて日本でも養子は珍しくなかった。今と違って、昔は一家にたくさんのお子さんがいるのが当たり前の風景で、養子として貰われたり、丁稚奉公に出されたり、子どもたちが早い時期に社会へ出て行った時代があった。それは貧困や親の再婚など多くは親の事情によるものであったが、それでも子どもたちは文句を言う術もなく、自分の運命を受け入れ、与えられた世界でたくましく育っていったものだ。私は彼らを、恵まれなかったとは思いたくない。里親宅で、奉公先で、あるいは成人後に誰かの愛情を深く受けたのだと信じたい。表面の身の上だけでみて、恵まれていないと他人に決めて欲しくないと思う。

ハリウッドのカップルが世界の子どもを養子に貰うことがままある。普通のアメリカ人でも、アジアの子らを養子に貰って子沢山になっている家庭を知っている。そこには彼らの「このころの自由さ」が反映されているように思う。

日本は妙に「血」にこだわる場所がある。そのこだわりや精神の不由さが、恵まれない子を作っているのかもしれない。「貰われっ子」といじめられた経験を持つ人もいることだろう。子どもはその種の情報を周りの大人たちから得るのである。

養子縁組の少なさの理由は、お金や法律の問題だけではなく、私たちの文化や歴史にもある。日本財団の試みが少しでも前向きに受け止められ、子どもたちのために活かされることを真摯に願うばかりである。

イラスト・伊藤栄章